

JIA 建築展 vol.15 (第42回まちづくり研究セミナー)
ワークショップ報告書

公益社団法人 日本建築家協会九州支部北福岡地域会

■ ワークショップ （2013年 10月6日, 10月26日, 11月2日, 11月3日）

会場

コムシティ大会議室（セミナー・ワークショップ）
コムシティ 204 会議室（プレワークショップ）
黒崎駅前ペDESTリアンデッキ

■ 会員作品展 （2013年 10月1日 ～ 11月17日）

会場

北九州市立美術館

- 講師
- | | | |
|---------|---|----------------------|
| セミナー | : | 前田 圭介（2012 年度JIA新人賞） |
| ワークショップ | : | 前田 圭介 |

■ ワークショップ参加校

北九州市立大学	7 名 (2 チーム)
九州工業大学	6 名
近畿大学	8 名
九州産業大学	7 名
東西大学 (韓国)	10 名 (2 チーム)
釜山大学 (韓国)	4 名
東亜大学 (韓国)	4 名
<hr/>	
参加学生 合計	46 名

- スタッフ
- 三迫 靖史 (JIA 北福岡地域会会長)
服巻 良樹 (相談役, 前代表幹事)

実行委員会

杉野 友紀 (実行委員長)

戸村 一樹	塩釜 直人	加藤 史衛	松島 逸人
永澤 正哉	高橋 雅彦	満井 輝吉	松岡 伸二

アドバイザー

福田 展淳 佐久間 治 赤川 貴雄 (資料提供)

■ ワークショップ概要 (1日目、2日目)

11月2・3日両日にわたり、黒崎コムシティにおいてワークショップが行われた。「22世紀の環境から創造する新たな未来」をテーマに、学生が黒崎のまちに入り、まちの人の声を聞きながら100年後の黒崎の姿を提案した。日韓の大学7校(9チーム)が参加した。

2日はその最終制作日で、3日はクリティークが行われた。

11月2日 ワークショップ会場にて建築家の前田さん、参加校の教授、JIA会員が、作業中の学生たちの作品に対して意見を交わし合った。午後は、黒崎駅前のペDESTリアンデッキにてまちの人たちに学生が自分たちの提案を説明し、意見交換を行った。また、まちの人たちに良いと思う作品について投票していただいた。

11月3日 前日の意見も取り入れた各々の作品を発表した。クリティークでは地元の代表の方も学生の発表に聞き入り、熱を入れて意見を交わしている様子が印象的だった。

■ ワークショップ全日程

10月6日(日) セミナー(場所:黒崎コムシティ大会議室) 参加者 約100名

タイトル : 「環境が生み出す人のつながり」

講師 : 前田圭介 (UID)

講師よりセミナーを通じてワークショップの課題が発表された。



10月26日(土) プレワークショップ(会場:黒崎コムシティ204会議室) 参加者 約30名

参加校 : 北九州市立大学 1 九州工業大学 九州産業大学 近畿大学
各校が提案コンセプトを発表し、講評者と協議を行なった。



11月2日(土) ワークショップ1日目(会場:黒崎コミュニティ大会議室及び黒崎駅前) 参加者 約200名

黒崎駅前で、講師およびまちの人たちに提案を発表し、意見交換をしながら提案作品を完成させました。約130名の市民のみなさんに投票していただきました。



11月3日(日) ワークショップ2日目(クリティーク 会場:黒崎コムシティユースステーション) 参加者 約90名

完成提案の発表およびクリティーク。日本と韓国、インドネシアからの留学生が発表し同時通訳を入れながら進められ国際色豊かなクリティークとなった。講師の前田先生と各大学の先生方からの質問や指導を交えて約5時間行われた。



■ 作品講評(発表順)

① 北九州市立大学1(福田研究室)



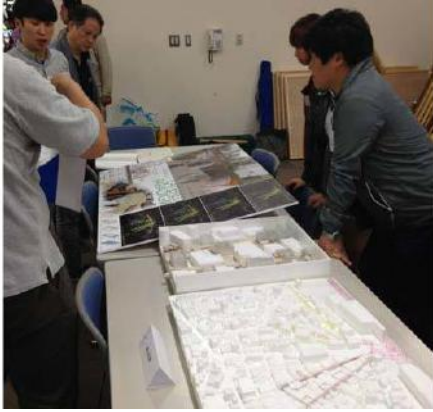
(提案) 100年後は PIXSEL と呼ばれる物体で自由な形態の建築が形成され、必要なものが形を変えて存在するまちとなる。もはや商店街は存在しない、もしかしたら設計者や建築家という概念すら存在しなくなり、誰でも自由に建築を作ることができるかも知れない。

(講評)

- ・ こんな未来もあるのかもしれないと本気で思わせるすごい案である。
- ・ 形態が変わっていく過程において、時間という概念が存在しなくなるのではないか。

回答: 必要なものは残り、不要なものが時間をかけて形を変えていき残っていくものに対しては、今とは違う感覚かもしれないがまちに対する愛着は残っていく。

② 釜山大学（韓国）



(提案) アーケードの屋根を、デッキ空間として自由に歩ける空間として 2 階部分を有効活用した、高齢者施設がもうけられる。1 階部分には、駅から引き込んだゆっくりと動く起動系の乗り物により、各地から食材や商品が搬入され、乗り物は時にはレストランにもなり 1 階部分を活性化させる。100 年先には、後背地にある住宅と商店街を結んでいく。

(講評)

- ・ 100 年先を考えることは自由であるが、軌道系の交通を取り入れるときには、スピードを設定したうえでデザイン提案をしてほしい。この手法を用いると、デッキ上はよいが、下の空間は薄暗くなりますますびれていく可能性がある。
- ・ 黒崎における、100 年後のユニバーサルデザインの提案であるが趣旨が読みづらい。
- ・ 電車の中に、いろんな機能を入れる意味が分かりづらい。

③ 九州工業大学



(提案) 100 年後の黒崎のまちは 850 人程度の人口になるというデータを基に、黒崎のまちは駅上でひとつのらせん状のタワーに集約され、その周辺は地産地消の農地となりやがて郊外から駅に向かう道沿いには、商店街が形成される。

(講評)

- ・ 集約されて最終的に、塔状になることはある程度理解できるが、建築のデザインとして黒崎の歴史を踏まえた上での提案であってほしかった。
- ・ この案はハード優先で考えられているのではないか、ハードとソフトが一体となった提案がほしい。
- ・ 60 年後の集積の状況であれば、商店街も残っておりそれを含めた提案のほうがまちのひとに興味を持ってもらえたのではないか。

④ 東亜大学（韓国）



(提案) 100年後の商店街が生き残っていくためのソフト重視の提案である。職人の技術を市民に提供し伝承しながら生涯学習の場を形成していくことにより、商店の周りにコミュニティができそしてそれらがネットワーク化されることにより、商店街と市民が一体となった生涯学習の場としてのまちが残されていく。

(講評)

- ・ 100年後というよりは、近未来の提案でありさまざまなアクティビティが想像できる面白い案である。ソフト提案から、具体的な建築に展開していくとさらに面白い案になる。
- ・ 100年後には、デジタルツールが格段に発達しその方面からの提案がほしかった。

⑤ 北九州市立大学2（赤川研究室）



(提案) 100年後になると、家族のあり方や商店街のあり方も変わりますます人のつながりが薄れていくことになるが、黒崎には祇園山笠という祭りがありそれを核にしたまちづくりを行えば、まちの未来は見えてくる。具体的には、街角に各山のお祭り広場を形成し、日常的に山笠を見ることのできる施設を設ける。祭りのないときでも、様々なイベントを開催することが、可能な空間とする。

(講評)

- ・ 祭りのない時期の、日常的な商店街のあり方についての説明が弱い。
- ・ 祭りを美化してはいけない、祭りの古来からの成り立ちを理解した上での具体的な建築提案をしてほしかった。
- ・ 放射線状のまちの中で、いろんな可能性を感じさせる提案であった。

⑥ 東西大学 2 (韓国)



(提案) 街区の中に空地や空店舗を集約したボイド空間を設けることにより、光や風を導入し開放的な空間を作り、そこに人を呼び込む 2 階のデッキや公共施設、公園など様々な仕掛けを設け街区ごとに特徴あるものとして、それぞれが刺激しあいながらまちを活性化させていく。

(講評)

- ・ ボイドは今の価値観の延長線上で考えても面白いと思う。2 階のデッキも、いろんなビルの高さに合わせてレベルを変化させることで商店街の中に新しい居場所ができるのではないか。
- ・ 通りに緑を設けているのが気持ちよさそうだ。
- ・ ボイドの共有空間や、通りの緑化をした場合にだれが管理していくのかを考えたうえで現実的な提案をしてほしい。
- ・ 新しい公共空間を作るときに、作るときにだれが主体となるかは行政が考えることではなく、まちの人が主体となって考えるべきではないか。

⑦ 九州産業大学



(提案) 博多や小倉等、都心への集積や効率化が進む中で 100 年後の黒崎のあり方を提案。

まちで過ごした思い出や景観を生かしながらすみ続けることができる、人情味のある商店街があることが黒崎の 100 年後の姿である。

(講評)

- ・ ライフスタイルの提案を、建築にどう生かしているのか読み取れない
- ・ 提案内容と、プレゼン資料とが一致していないのではないかと。もう少しわかりやすい説明がほしかった

⑧ 東西大学 1 (韓国)



(提案) 「虞室生白 (空間を空にすると光が入り込む)」 という韓国のことわざを基にした提案。
「空間を空にして機能を入れ他の空間につなぐ」 ことにより密集した商店街のなかに 抜けをつくり階段や吹き抜け空間を設けて、緑や光を取り入れて、公共的な空間として路地と路地をつなぎながらまちを活性化させていく。

(講評)

- ・ 100年先の商店街の環境を考えた時に、この内容で持続可能な提案といえるのか。
回答：40年先までしか考えていない。それ以上の未来は考えづらい。
- ・ 機能として多様な考えがあるところが、おもしろい。「これからの都市は単一の機能だけではなく多機能な都市にするべき」という考え方がある。

⑨ 近畿大学



(提案) まちを緑の並木で覆われた思い出の道と称した緑のサークルの中に形成し、都市ゾーン・居住ゾーン・農業ゾーンを設け、駅からサークルの中心に向かう道と中心に設けたバーチャル空間により、サークルの中で生活しながらすべての情報が手に入るまちを提案しているが、最後は情によって人と人がつながっていくことの大切さを説いている。

(講評)

- ・ 商店街についてはどのように考えているのか。
回答：バーチャル通路の中にリアルな商店街が少しだけ残り、そこでは自給自足のための農地でできた食材を対面販売する。
- ・ 日本と韓国の学生の提案の仕方の違いに驚いているが、現実的な提案をした韓国と将来の形を提案した日本の提案を合体させるともっといい提案になるのではないか。

■ ワークショップ審査結果

前田賞	北九州市立大学1（福田研究室）
黒崎賞	九州工業大学
JIA賞	東亜大学（韓国）

■ クリティーク総評者

寺下 良真	（黒崎まちなか大学学長）
前田 圭介	（UID）
尾道 建二	名誉教授（九州共立大学）
岩下 陽市	教授（九州職業能力開発大学）
福田 展淳	教授（北九州市立大学）
益田 信也	准教授（近畿大学）
佐久間 治	教授（九州工業大学）
Lee Sang Jun	教授（東西大学（韓国））
Oh Gi Whan	教授（東西大学（韓国））
Yu Gea Woo	教授（釜山大学（韓国））
Kim Hyoung Chan	教授（東亜大学（韓国））
Hong Juhg Howan	教授（東西大学（韓国））

■ クリティーク総評抜粋（総評順）

前田圭介先生（UID）

皆さん普段は 100 年後のことは考えていないと思う。建築家は見えないものを作り出す仕事であるが、今回いろんな 100 年後を見せてもらった。情報化の現代、いろんなものが消費されていくが建築はそうではない、だからこそしっかりと未来を見据えてやっていくべきである。未来を考えると今何をやるべきかが、見えてくるはずである。今回考えた 100 年先のことを、これからも考え続けてほしい。誰かの案が実際に現実のものとなっているかもしれない。この一か月間は、私にとっても皆さんにとっても素敵な一か月であった。

Lee Sang Jun 教授（東西大学（韓国））

韓国でも伝統的な商店街がいろんな問題を抱えている。10 年前に日本で見たアーケードが今韓国でも多くみられるようになった。今回黒崎商店街を見て、そのアーケードがまちの障害になっていると感じた。今回ワークショップを通じて学んだことを、今後の韓国での商店街再生の参考にしたい。問題解決の手法としては、官と民が一体となってやるべきと考えている。

Yu Gea Woo 教授（釜山大学（韓国））

毎年難しい課題で悩んでいるが、今年はさらに難しいものであったが一方では皆さんがどんな提案をするか楽しみでもあった。学生たちにはいい経験になった。来年も楽しみにしています。

Oh Gi Whan 教授（東西大学（韓国））

課題では毎年悩んでいる。韓国のことわざ「10年たったら世の中変わる」ということがある。九州の人は10年たっても、人情は変わらない。そして建築を愛する心と日韓交流もかわらない。これからもよろしくお願いします。

益田信也准教授（近畿大学）

日頃学生には生きているユーザーのことを考えるように言っているが、100年後を考えるように指導したことはなかった。反省になりいい機会となった。100年後はみんな死んでいて言い訳はできない、だからこそ建築家には大きな責任がある。そしてまだ生まれていない子供たちに素敵な贈り物ができるのも建築の素晴らしさである。

佐久間治教授（九州工業大学）

皆さんに二つの言葉を送ります。一つ目は「感謝」です、前田さんの課題と学生たちの頑張り感謝します。二つ目は「創造」です、昨年も難しい課題であったが今年は100年後を考える課題でさらに苦しかったが、日本、韓国、インドネシアからそれぞれ提案があり考え方もさまざまであったが、「創造」の中にこそ未来があると感じた。

岩下陽市教授（九州職業能力開発大学）

今回の課題は、日本の地方都市すべてが抱えている問題である。1950年代は、人口も多く商店街もにぎわったが、50.60年たつと空地や空店舗が増え問題化してくる。これは韓国も同じであろう。都市はメンテナンスを怠ると疲弊していく、ハードだけでなくソフトもコミュニティも同じことである。学生の皆さんが社会に出て活躍するころには、このようなまちの再生の仕事が沢山出てくるはずである。その時は是非ハードだけでなく、ソフトをしっかりと考えて取り組んでほしい。

尾道建二名誉教授（九州共立大学）

なぜ北九州市立大学(福田研究室)案が、一番であったかそれは模型の素晴らしさである。未来の模型の作り方を提案していた。新しい構造の提案(PIXEL)もあったがこれは少し難しくすぎて皆さんにはよくわからなかったと思う。各大学それぞれ違う案であるが、全てを一つにする素晴らしい案ができる。黒崎の人も全てを集めた案をイメージしてほしい。建築を志す人間として日韓に国境はない、お互い切磋琢磨して頑張りましょう。

Hong Juhg Howan 教授（東西大学（韓国））

13年間このワークショップに参加している。2000年から尾道先生その後九大の片野先生に師事した。多いときは韓国から6大学参加したこともある、今年は3大学であるがもっと参加校を増やしていきたい。みんな考え方は違うがそれは悪いことではない、ポジティブに考えていきたい。今年で15回目であるが、今後30年、40年と続けないと意味がないと思う。今後ともよろしくお願いします。

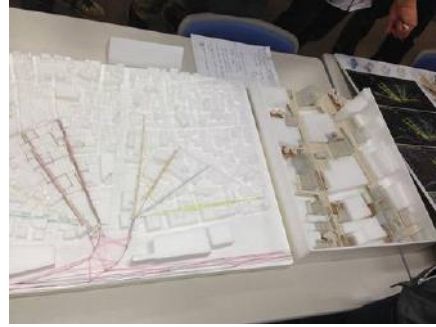
寺下良真学長（黒崎まちなか大学）

学生時代に、海外を含めて6か国で「100年後の世界を考える」政策論争を行った。自分は国際政治が専門であったが、100年後を論じるには専門以外の分野も勉強しないとできない。みなさんは建築が専門であるが、広い知識を持って建築の道を歩んでほしい。

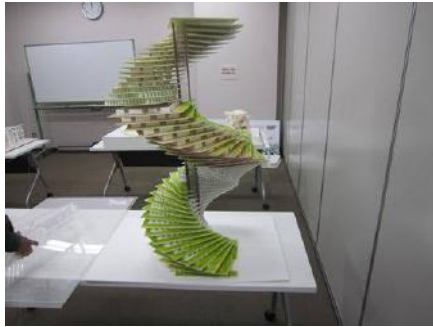
■ 提案作品(発表順)



1.北九州市立大学 1



2.釜山大学(韓国)



3.九州工業大学



4.東亜大学(韓国)



5.北九州市立大学 2



6 東西大学 2(韓国)



7.九州産業大学



8.東西大学 1(韓国)



9.近畿大学

11月3日のクリティークに先だって JIA 建築展・ワークショップ 15 周年を記念して日韓の功
労者に JIA 北福岡地域会より感謝状と記念品を贈呈した。

■ 感謝状贈呈者

尾道 建二 名誉教授 (九州共立大学)

Lee Sang Jun 教授 (東西大学 (韓国))

Oh Gi Whan 教授 (東西大学 (韓国))

Yu Gea Woo 教授 (釜山大学 (韓国))

Kim Gi Soo 教授 (東亜大学 (韓国))

Hong Juhg Howan 教授 (東西大学 (韓国))

